岡山大学大学院教育学研究科研究集録　第187号（2024）145－151

意味づけするとは何か

宮﨑　宏志　・　曽布川拓也*

人間はコミュニケーションの動物であると言われる。しかしその対象についての解釈（意味）が異なればコミュニケーションは成立しない。本論では意味づけするとはどういうことなのかについて考える。

Keywords：素象，コミュニケーション，意味づけ

１．宙ぶらりんな存在

母語でない言語に初めて出会ったとき，それが目の前で人間の口から発せられた音声であれば，人間が何か意図をして声を出していることはわかるであろうし，それに何らかのメッセージが込められていることもわかるだろう。手話であればそれを言語として認識するのには少しの知識を要するかもしれないが同様である。発話者は何らかの意図・意味を込めてそれを発しているだろうけれど，受け取る側からすると全く何のことであるか理解できない。文字で書かれていれば検索も可能かもしれないが，いきなりbůčekと書かれたらどうだろう[1]。昨今は検索ですぐにわかるという向きもあるだろうが，アルファベットに記号がついている場合には入力も難しいし，正確な発音がわからなければ音声入力もできない。そうなるとこの言葉が何を言っているのかはかなりわかりにくい。文字で書かれているのだからこれが言葉だということはわかるが，それが何語なのかさえもわからないだろう。読む側は何か情報を得たいと思う状況であっても容易でないことがある。

数学においても似たようなことが観察される。およそどんな人でも数式を初めて見たときにはそれが何を意味しているのかわからないだろう。例えば

$$a^2 + b^2 = c^2$$

というようにアルファベットと数字と数学記号で書いてあっても，まずその数学記号の意味を正確に知る必要がある。＋とは，＝とは何か。２という数字が文字の肩に書いてあることは何を意味するのか。a, b, cは何を意味するのか。それは数なのか。どんな数でも良いのか特殊な値についてのみ成立するのか。ピタゴラスという人の名前を思い出せるのか，直角三角形という図形まで思いが至るのか。その理解の仕方は人それぞれになる。もちろん拒絶する人もあるだろう。また似たようなものに見えるが，

Z=X^2+Y^2

という文字列がコンピュータのプログラミング言語に表れたら，これは実は全く異なる状況である。

多くの人にとって哲学の文章に対するイメージも似たようなものかもしれない。哲学の文章が難解であるといわれている理由はいくつかあるのだが，その１つとして「文が長い」ということがあげられるであろう。例えばカントの文章は１つの文がページ半分にもわたるケースがある。我が国で明治以降そうした西洋哲学を輸入する場合に，原文に忠実に翻訳が行われてきたため結局１文は長い。書かれている主張に権威を与えるために難解な文章を書いていると揶揄する向きもあるようだが，そのような研究者はないと信じたい。

ではなぜそのような文章を書くのだろうか。いや

岡山大学学術研究院教育学域　700－8530　岡山市北区津島中３－１－１
*早稲田大学グローバルエデュケーションセンター　169－8050　新宿区西早稲田１－６－１

What Is “Meaning” ?

Hiroshi MIYAZAKI, and Takuya SOBUKAWA*
Faculty of Education, Okayama University, 3-1-1 Tsushima-naka, Kita-ku, Okayama 700-8530
*Global Education Center, Waseda University, 1-6-1, Nishi-Waseda, Shinjuku-ku 169-8050

[1] 筆者はプラハの街のレストランでこの言葉の意味がわからなくて困惑した。結局は指差しで注文はできて，おいしい食事はできた。チェコ語で（豚の）脇腹，いわゆるバラ肉のことである。

書かざるを得ない理由は何なのだろうか。それは我々が自然言語を用いてその思想を表現しようとするからである。コンピュータが相手となる人工言語ならば少し状況が変わってくる。コンピュータは命令に忠実に従うが，こちらの言い分や細かいミスに忖度してくれることはないので，意味が厳格に決まらなくてはならない。昨今のAI技術は，表面上は人間の言うことをうまく解釈してくれるように見えるが，人間がそう感じられるようなシステムが構築されているだけであって，原理的には指示をその通りに実行するだけである。しかし自然言語によって表現する場合には同じ文章であっても受け手によって意味が取り違えられることがある。そういう意味で発したわけではないのに相手は全く別の意味で捉えていることも少なくない。そのため，書き手は自らの主張が誤解なく相手に伝わることを企図して，修飾語を重ねることでその内容を限定し，例外についてももれなく言及しようとする。場合によっては定義を明示しながら新しい言葉を作ることもある。勢い，１文は長くなってしまうのである。さらに言えば１文で表現するのが不安になって，同じような内容を言い換えて文を重ねることも多く見受けられる。

しかし自然言語の持つ曖昧さは，必ずしも悪いことばかりではない。意味を狭く取らず，受け手に解釈を任せることによって人間関係が円滑に進むこともあるだろう。世界中にはたくさんの言語がある。すでに消滅してしまった言語もあるものの，今なお多くの言語が使われていることからみても，どの自然言語もその存在意義が小さくないことは明らかである。しかしそれを用いて何かを表現したとき，書き手の側と読み手の側，また複数の読み手によって異なる解釈が与えられる可能性は避けられないものである。そうみると，言語表現というのはかなり宙ぶらりんなものであると言わざるを得ないであろう。

ところで2020年はそれまで認識されていなかった新しい感染症が蔓延した年であった。そのために経済活動が停滞し，悪い影響を被った人があった一方で大きく利益を出した業種もあった。在宅勤務で通勤地獄から解放される人がいた一方で，職場の人間関係が希薄になり，新入社員教育が難しくなった。またオンライン授業が急速に普及したことで教育の形が大きく変わった。同時に部活動などに大きな制約ができて，若者の仲間の絆が薄れたという話もある。ワクチン接種が効果をもたらした人もあれば，長く後遺症に苦しんでいる人もある。こうしてみるとこの感染症蔓延という出来事に対する解釈は人によって大きく変わってくる。このような社会的な出来事でさえも，その意味合いを考えるとそれ自体は宙ぶらりんなものである。

もっと個人的な出来事，入学，卒業，就職といった個人的な出来事も，当事者であっても希望に満ちたわくわくするものであるとは限らず，暗澹たる気持ちで臨むこともあるだろうし，さらに言えば周囲の人，例えば親戚のおじさんからするとご祝儀をはずまなくてはいけないと思うかもしれないし，関係ない人はそのセレモニーを騒々しく迷惑に思うかもしれない。

歴史的な出来事，アジア太平洋戦争，明治維新，応仁の乱，大化の改新といった歴史的な出来事も様々な評価・解釈・意味づけが行われるものである。

人が様々な言葉，物事，出来事などを考えるとき，必ず何かの評価・解釈・意味づけを行うであろう。その評価･解釈･意味が定まる前の宙ぶらりんな存在，場合によって人によって異なる意味・解釈が与えられ得る状況にある存在を我々は**素象（そしょう）**[2]と呼ぶことにする。

２．意味を与えること

小学校で初めて数式を学ぶ。最初に数式に出会った子どもたちにとって，それは意味も何もない素象であると言える。何が書いてあるかまったくわからない状況で子どもたちがその意味や用法を習得していくときに手掛かりとなるのは，その子どものそれまでの経験，そしてその段階で使っている母語の知識であろう。例えば

$$100 \times 4$$

という表現について，まず100や４が何を表すか[3]を知らなくてはいけない。その上で問題になるのは「掛け算×」である。日本語を母語として育った子どもに対しては

> １本100円の鉛筆を４本買ったらいくらになるか，100メートルずつ４人で走ると全部で何メートル走ることになるか

という具体例を挙げながら，その計算と同時にこうした100×４という素象の意味を構成していくのが算数教育の常道である。このときに我々が依って立

[2] 英語ではprimitive objectという訳語を当てることとする。

[3] 小学校では10進位取り記数法を用いる。数学史や算数教育を知っていれば，それ自体が決して易しい表現ではないということがわかる。

つのは，「学ぶのが日本語を母語とする子どもが大半である学校という状況」である。そして子ども，教師，教科書などのテキストその他の題材の相互のコミュニケーションを通じて互いに共通認識を構成していく[4]。構造としては「100＋100＋100＋100」「100が４つ分」である。日本語は多様な表現を持つので語順を入れ替えて同じ状況を表現することが可能である。よって単純に日本語の語順と数式に登場する語順が一致すると断言してはいけないが，上のような日本語表現を基調にしてこのように文字が並んだ素象に意味を与えるのが，日本の算数教育のスタンダードである。

ここで気をつけなくてはいけないのは，素象は本来意味を持っていないということである。数式も「元来決まっている意味」はない。違う状況，例えば英語を母語とする子どもたちが多くを占める状況では，

乗用車１台を作るには４本のタイヤを使う。
100台作るのにタイヤは何本使うか

という具体例から100×４という式が出てくるべきである。というのは，英語の発想では100 carsという見方が先にある。それに対してそれぞれの乗用車を４ tiresで置き換える。このことを100×４という数式で表現する。どちらが正しいという優劣はない。注意しなくてはいけないのは，意味の問題はあくまでもコミュニケーションによって決まるということである。「誰かが/何かが絶対に正しい」という見方は慎まなくてはならない。例えば日本語を母語とする子どもたちのクラスで100メートルずつ４人走るときに４×100と表した答案を不正解とすることは評価者の誤りである。「４人が100ｍずつ走る」と思えばこの順であっても問題はない。さらに英語を母語とする子どもたちのクラスでは，むしろそれが自然だからである[5]。ちなみに、順序が違っても計算結果が同じになるということと，小学校における（素象たる）数式の意味づけには何の関係もないということを確認しておかなくてはならない。大切なのは「誰と誰が」「どうコミュニケーションをとるうちに」決まっていくものかということである。

第２言語の習得についてはもっと顕著である。例えば英語のissueという言葉を考えてみる。我が国において英語を学ぶ大きな機会の１つが大学受験である。抽象的な文章が出題される大学入試でこの語が出てくるときには大抵「問題点」というような意味で使われている。効率よく受験勉強をするならばそれだけを覚えておけば十分であろう。しかし定期的に発行される雑誌の番号「巻」もissueであるし，動詞としてよく目にするのは「（パスポートなどを）発行する」という意味である。異なる言語間で単語が１対１に対応するということはほとんどあり得ない。外来語のようなものでも原語の意味から変わってしまっているケースも数多い。そのことも踏まえると，第２言語においては言葉の意味を考えるときには，素象に対する意味づけという見方が必要であるし，その意味づけはその言語を使う（多くの）人同士の長年にわたるコミュニケーションによって決められてきたものだということを知っておく必要がある[6]。

素象とその意味づけについて考える上で我々がもっとも注目しているのは，出来事に対する意味づけである。例えば「18歳の日本人女性が出産し，子どもは元気である」という出来事を考えてみよう。とりあえず日本国内だけでものを考えることにする。それでもこの出来事がどういう意味を持つと捉えるかは千差万別である。

- 子どもが生まれることは否応なしに良いことだ。
- 人口減が続く我が国ではそれに少しでも抗うことなのだからよい。
- 18歳ではまだまだ勉強しなくてはいけないことがたくさんあるのに早すぎる。
- その女性の将来を決めてしまうことになり，望ましくない。
- 成人なのだから悪く言われる筋合いはない。
- パートナーがはっきりしていて責任を取ることができるのか。収入があるのか。育てて行けるのか。
- 子どもは社会で育てるべきものだから，周囲の状況を整えるべきだ。
- 生物学的には十分出産可能であるし，むしろその方が好ましいこともある。

少し考えただけでもすぐにこれくらいは列挙できる。このように色々な「捉え方」がある。これは先に述べた「語句の意味」とは異なるようにも見えるが，我々は「語句の意味」も，そもそも異なる「主観」同士のコミュニケーションによって形成されるものであるという立場・見方を取るので，これも同

[4] 我々は「言葉の意味はその使用によって決まる」という後期ウィトゲンシュタインの考えに近い立場を取る。
[5] 4 runners, each runs 100 meters.
[6] 英語で書かれた文献の講読を行うとき，出てくる単語を辞書で調べ，最初にある訳語をとりあえず並べて日本語の（ような）文章を作り上げてきて「まず訳すと」とやる学生が多いのは残念なことである。

じ「意味」という言葉の範疇で考えることにする。

３．素象とコミュニケーション

世間には数式をみただけで不快に思う人が多数いる。しかし数式によって表されている内容を，数式を使わずに日本語や英語といった自然言語で表そうとしたら大変なことになる。例えば３＋２という数式を，数字・数詞を使わずに説明するのは実質的にはほとんど不可能であろう。一方でこの数式が使える人でも３や２や＋の意味（定義）をきちんと述べられる人はごく希である。そう考えるとこの数式について各人の解釈が完全に一致していると断言はできないわけだが，それで誤解や誤用を生じる可能性はかなり低い。なぜなら数式は多くの人が同じカリキュラムに沿って学び，それを使ってコミュニケーションを重ねてきたからである。それが数式を用いて議論していくことの利点であるといえる。この過程について言い換えれば，数式は素象の形で呈示され，人々はその意味を検討しながら理解していく[7]。それに比べると，自然言語を用いて抽象概念を議論する哲学のような領域では逆に苦労することも多い。新しい概念を導入して議論するのにすでに使われている言葉〇〇を使って述べようとすると，「〇〇とは本来こういう意味であって」という議論になってしまって，肝心の新しい概念についての議論が忘れられてしまうようなことが往々にしてみられる[8]。本当のところ，言葉の意味についての議論をしても，つまりは「これまでこういう意味で使われてきたのだからそれに従うべきだ」という話である。しかもその「これまで」が各人によって異なることから対立が起きるわけである。従ってその論争は不毛である。もしそれによって何か結果が得られるとしても，それは学問とは違う何かの尺度によって決定されることになりがちである。そこでだれかの主張が通らなかったとしても，主張の内容そのものの優劣を表しているものとは限らないことは言うまでもない。

一つの素象に対して複数の人がコミュニケーションする状況を考える。単純化するために２者のコミュニケーションについて考える。当然参加者はその素象に対して何らかの解釈・意味づけをそれぞれ行うはずである。もちろんいきなり知らない数式が出てきたときのように，また知らない言語に出会ったときのように，全く意味がわからないということもあり得る。それも含めて，起きうるケースについて検討する。

３−１．その素象についての解釈が全く一致する場合

異なる２者が全く同じ解釈を持つことなどあり得ないという意見もあるかもしれない。確かにそれは実現不可能な理想状態のように見えるが，このようなことが（擬似的にせよ）おきるケースがある。それは数学の議論である。数学では発信者がその素象の意味を定義というかたちで提示する。そしてその場はその定義に従って演繹が進行されて世界が形成されていく。もちろん同じ素象に対して異なる定義で議論なされることがある。そのときには前の場合と異なる世界が形成されることがある。例えば次のようなケースである。

例１．「我々の世界」とは「平面のことである」とする。ここで言う平面とはユークリッドの公理が成り立つ世界である[9]。最短距離を結ぶ線を線分，それを無限に伸ばしたものを直線と呼ぶ。３本の直線で囲まれた部分を三角形であるという。このとき三角形の内角の和は常に180度である。

例２．「我々の世界」とは「地球の表面のことである」とする。このとき２つの地点を最短距離に結ぶ線を線分，それを無限に伸ばしたものを直線とするならば，直線は大円である[10]。すると北極で90度に交わる２本の子午線と赤道で囲まれる部分は三角形になる。子午線と赤道は直角に交わるので，この三角形の内角の和は270度になる。

これらは，「我々の世界」という素象に対して異なる意味を与えたときに，全く異なる世界が構成される例である。前者はユークリッド幾何学，後者は球面幾何学と呼ばれ，どちらも重要である。「我々の世界」についてさらに別の意味づけをすることも可能であり，それに従えばまた別の世界が構築される可能性がある。数学の世界ではとりあえず演繹によって破綻なく構成された世界はすべて認める。他の人がそれに興味を持つかは別として，それが既知の何かとどう関係するか，また何かに役立つかどうかについてはとりあえず評価の対象にしないし，そ

---

[7] A. Sfardは我々の言う素象とは少し意味が違うが，算数・数学の概念はこの形で検討されながら獲得されていくと述べている。Sfard, A.（岡崎正和ほか訳）「コミュニケーションとしての思考」(2023)，共立出版。

[8] 本稿で「素象」という用語を用いることにしたのはこのような無用のトラブルを防ぐためである。

[9] 我々が中学校で習う平面図形の世界である。

[10] 地球の表面を，地球の中心を含む平面で切った切り口のこと。子午線や赤道がそれにあたる。

れによって排除されることはない[11]。

このように，ある素象に関するコミュニケーションにおいてすべての参加者がその素象に対して同じ解釈を共有しているならば，そこでは考慮しなくてはならない問題は起きない。

3−2．その素象についての解釈が全くすれ違っている場合

次に一つの素象について参加者がそれぞれの解釈を表明したときに，それらがまったく食い違っている場合を考える。これには一方がその素象について全く知らず，全く解釈を持たない・表明できない場合を含む。数学においてよく出てくる笑い話として

$$\frac{\sin x}{x} = \sin$$

というものがある。s, i, n, x という４つの文字が分子に，xという１つの文字が分母にあるのだから，xを約分してしまうという話である。しかし、中学レベルの数学を理解しているものの三角関数について全く知識がないとすれば，こういう計算をしてしまうことは仕方がない。必ずしも責められるものではなく，また笑われるべきものとも限らない。このような計算をしてしまうような状況では，（提示者と解答者の間で）素象$\sin x$についての解釈は全く食い違っていると言って良い。一般にはこのような状況下ではコミュニケーションを取ることはできない。

しかしこの例でわかるように，教育の世界ではこのようなことは日常である。英語の授業においてtakeという単語を「竹」と訳してしまうようなものである。第２言語の場合，初期の段階では教える側が（何らかの意味で）最も適していると思われる母語の訳語を「これが意味だ」と強制することから始まるケースが多いであろう。この例において「取る」という訳語がふさわしいような例文を挙げ，そのsubstitutionを行うことで「take=取る」という形でとりあえずの定着を図るというようなやり方である。takeは非常に基本的であり用法も幅広いのでこの教え方では全く不十分であるが，これを切り口に（もしくはまた別の訳語を強制的に呈示することによって）この語が使えるようになることを目指していくといった方法が採られる。

算数・数学は言語とみることもできるが，母語を用いて考えるとなると，訳語を与えても単なる言い換えに過ぎず，解釈を持つ（意味を理解する）ことにはならない。そこで学習者の側がもつ知識（経験も含む）を足掛かりにして概念を構成していくことを図る。例えば小学校２年の算数で「かさ」という単元がある。これは「傘」でも「笠」でもない。漢字で書くならば「嵩」である[12]。具体的には（主として）液体の体積についての議論である。ここでは「リットル」という単位を学ぶ。大半の子どもがそのような概念を知らないであろう。実際に中心として学ぶのは「リットルL」ではなくて「デシリットルdL」である[13]。１dLは小さいコップ１杯分なので，実際に水の体積を量ってみることで感覚的に体積・容積の単位であることを認識することができる。このことを起点にして「デシリットル」「リットル」という素象の意味を知るのである。

初等段階，また中等段階以上であっても，学習者に対して教師がこのように素象の意味を伝えていくことはとても重要なことである。教科教育の中心であると言っても良い。

3−3．その素象についての解釈が部分的に一致する場合

最後に一つの素象について参加者の解釈が部分的に一致する場合を考える。そもそも部分的に一致するとはどういう状況なのか，言葉面だけ一致していても心の中で考えていることが食い違っているのではないか，などこの状況について細かく検討すべきであるという立場もあり得るが，ここでは参加者それぞれが言葉で説明する素象の解釈が，完全ではないながらも共通点があると双方が認識した状態を指すこととして議論を始める。

(1) 双方が解釈の枠組みを変えない場合

コミュニケーションの参加者双方が特に自分の解釈を変えようとしないとしよう。それでも共通する部分があるので，コミュニケーションは可能である。とりあえず「言葉で説明した解釈が共通」している

---

[11] 学術雑誌への論文掲載という意味では排除されることもあり得るが，それはその雑誌のポリシーであって学問上排除されるわけではない。

[12]「嵩」という言葉は，近年はあまり使われないのかも知れない。

[13]「デシリットルなどという単位は実生活では使わない，こんなのは無駄だ」という意見を良く聞く。しかし1Lの水は1kgの重さなので3Lや4Lを扱うことには無理がある。mL（ミリリットル）は我が国では日常使う単位であるが，手作業で1mLと2mLの区別をするのは不可能である。欧州などではcL（センチリットル）という単位が使われているのをみることもあるが，1cL升を使って6cLと7cLを量り分けることは，少なくとも小学校２年生にとっては容易でない。

状況を考えているが，コミュニケーションを図って行くにつれてその共通部分が本当に共通している場合もあれば，言葉の上では同じであっても実際の中味が食い違っている場合もある。この状態でコミュニケーションを進めていくと，場合によっては実は解釈が全く一致していなかったことが判明することもあり，またその共通点を確認するだけで終わることもある。全く一致していない「すれ違い」の状況は３−２節で述べている。単に確認だけで終わった場合にはあまり実りのないものになるかもしれない。しかし実際にはこれらのような形になるケースは少なくないものと思われる。

(2) 一方が他方の枠組みを強制的に変えさせようとする場合

本節の最初にこのような例について述べた。それに対して批判的な意見は当然あると思われるが，実際には学校教育において長年に渡りかなり数多く行われてきたことである。最も典型的なのが，画一教育といわれるものである。学習者が何を考えようと一顧だにせず，教師の言い分を押しつけてしまうやり方は，先進国に追いつこうとする途上国ならば意味があるが，さらに伸びようとするときに負の部分が大きいことはよく語られている。枠組みを変えられた側は，その考えのいくつかを切り捨てることになる。それが妥当なことなのだろうか。確かに切り捨てて闇に葬ってしまえば，良かったか悪かったかの議論にはならないかもしれない。しかし何百年もの間マニアが面白がってやっているだけであった「大きな素数を探せ」プロジェクトが，20世紀後半になって，モバイルデバイスの通信におけるRSA暗号の理論の根幹に据えられたことなどを考えると，それを切り捨てずに残してくれた先達に対して感謝しなくてはならない。

(3) どちらか，もしくは双方がともに相手の解釈を取り込もうとする姿勢である場合

１つ例を考えてみる。2024年春，外国為替相場は「円安」であると言われている。比較対象の問題があるが，少なくとも「円安傾向」にあることは間違いない。これを１つの素象としてそれに対する解釈を検討してみよう。解釈は立場によって変わるものである。例えば次のような可能性がある。

企業経営者Ａ：円安であれば，外貨建てで同じ価格なら円建てでは高く売れて利益になるので好ましい。

企業経営者Ｂ：円安だと輸入原材料費が値上がりする。製品への価格転嫁が難しいので，好ましくない。

海外投資家Ｃ：日本の株式市場は海外から見ると割安に見えるので積極的に買おう。

国内投資家Ｄ：国外投資家が買うだろうから株価は上がる。今が買い時だ。いつ売り抜けるか。

海外経営者Ｅ：日本の労働力が相対的に安くなるので，日本国内に工場を建てよう

国内消費者Ｆ：輸入品が高くなって生活が苦しい。

来日旅行者Ｇ：日本は物価が安く，商品やサービスの質が高いので購買意欲が湧く。

同じ素象「円安」であるから，外国為替のレートが変わるという認識は同じであり，その部分は共通であると言える。しかし企業によって円安による影響は大きく異なる。輸出を中心とする企業の経営者Ａと国内製造業の経営者Ｂとでは影響がむしろ逆である。この両者が同じ素象に対して異なる解釈をとっているわけである。企業Ｂが企業Ａに製品を卸しているとすると，特に対策を取らないならば，企業Ａは利益が増加，企業Ｂは利益が減少していく。これが続けばＢはＡに納品することが難しくなる。そこで両者がコミュニケーションを取り，その結果，製品価格が調整されることになるであろう。

企業Ａと消費者たるその従業員Ｆが素象「円安」に対する解釈は一見関係ないようだが，従業員の生活が苦しくなることは結果的に企業の活動に悪影響を及ぼす。そこで両者のコミュニケーション（労使交渉）によって賃金を上げる方向に進むかもしれない。同じ企業であってもＢの場合には賃金を上げることが難しいケースもあるかもしれないが，消費者＝購買者が経済的に逼迫していれば自社製品を購入してもらうことも難しくなるのでそういう方向へ向かわなくてはならない。

他の組み合わせでも，同じ素象に対して異なる解釈を振りかざしているだけでは結局自分自身が立ち行かなくなる。このときに，両者のコミュニケーションが重要になってくる。社会が資本主義を標榜しているとしても，実際に資本がすべてを支配することは難しく，こうしたすり合わせを行う必要がある。そして最終的には緩やかなインフレーションの状態を作ることが望まれているのである。「平成」と呼ばれる時代はそれなりに国が安定していたとは言えるが，経済的に諸外国と比べて発展しなかったのは，こうしたコミュニケーションが不足していたからなのではないだろうか。この例からしても，コミュニケーションは相手の解釈を取り込むという姿勢が重要なのであると言える。

４．まとめ

本論では「素象」という概念を導入した。これは考えたりコミュニケーションの題材にしたりするものであるが，それに対して意味を与える前の段階をいう。実在するもの，言葉，出来事などその範囲は多岐にわたる。素象の意味付け・解釈はまず各人が行う。コミュニケーションは，何か素象に対して，その参加者それぞれの意味づけ・解釈を持ち寄って交換することから始まる。その場において素象の意味は検討され，場合によっては変化していく。そして最終的には参加者それぞれが素象の解釈の幅を拡げるための場になる。従って素象に対する解釈が参加者ごとに食い違っている場合，我々はまずそのすべてが肯定されるべきものであるという立場をとる。後に淘汰されてしまうものはあるにせよ，元来優劣はないと考える。